

# 生活報

2125年版

発行日：2125年7月16日  
編集：都市単居福祉観測局  
心静処部門



## 私的感情ログ 非公開領域より



都市型日誌管理クラウドに記録されない“心の下書き”は、今なお手書きで残されている。湯に浸かったら、気圧変動ログよりも安心できた。応対が少し気を遣ってくれた気がした明日の献立を考える余力があったことを、自分に褒めたい。人々はこれを“心の見えにくい動きの微観測”と呼んでいる。

こうした記録は、社会的な評価にも医療的な診断にも使われることはない。だが人間にとっては、日々を“自分で感じ、自分で肯定する”ための証明となっている。記録されない感情にこそ、その人らしさが最も濃く刻まれているのかもしれない。

## 今日を終える技術 “おやすみ”の方法が生活の質を左右する

2015年、都市型單身者の約9割は“静音住宅域”に居住している。ノイズ除去壁、調光式パーソナルグロー、自己再生寝具……それらに囲まれながら、**2010さん**（仮名単独居住歴5年）は夜の時間を「自分に戻る儀式」として大切にしている。刺激を受けすぎた神経を感覚遮断モードで鎮める。その状態で読むのは、触感型端末に投影される旧時代の文学、または無音映像。

何も考えず、でもちゃんと満たされる時間がないと壊れそうになる。“楽しい”じゃなくて、“静か”の中にいたいんです。

こうした就寝前の自己回復習慣は、近年、都市生活福祉研究所でも注目されている。



## 慰食文化の再評価 機能ではなく気持ちで食べる時代へ

食の本質が“設計された栄養”に偏る中、“誰のための食事か”という問いに、**21015さん**は静かに抵抗している。



“摂取効率主義”が当たり前になった今、**21015さん**の食生活には“慰食”の概念が生きている。特に好んで食べるのは、豆乳を使ったスンドゥップ風粥型食品。自動温調コンテナで数分加熱するだけだが、本人の味覚嗜好ログに合わせて辛味が毎回微調整される週末には調理サポートとと共に、冷凍保存用の料理を複数仕込む。

準備された安心を、数日後の自分に手渡す感覚です。

一方で、個人の情緒に寄り添う食の価値は、依然として数値化も最適化もされていない領域にある。味の記憶や気分との相関、誰のために用意されたかという文脈までは、いまだ計測対象ではない。それでも人は、必要な栄養以上のものを、ひと口に求めてしまう。

**21015さん**の食卓には、機能ではなく気持ちを支えるための一皿が、今日も静かに並んでいる。

ステージへ。新出された、科学が導いた「最適解」です。食の栄養バランスを追求した、生体データを基にした完全無欠な究極のここに……

2125年、食の最適化は、あなたのための「最適解」です。生体データを基にした完全無欠な究極のここに……

バイタルログが紡ぐ心の旋律

エッジセンター (AURA) オープンは、2125年の都市生活に最適化された、個別感情補正型オーディオガイドデータでは捉えきれない“あなたらしさ”を、音の選択で静かに支えます。

科学が設計した、あなたのための最適解。

